

平成 23 年度（財）全国高体連自転車競技専門部

アンケート結果の考察

技術審判部会長 折本裕樹

当専門部では、高校自転車競技の更なる発展を期する為、様々な施策を講じてきた。今後、高体連としての企画立案を進める上では顧問や選手の実態調査を行い、参考とすることは大変重要であると考えている。昨年、インターハイ監督へ第1回アンケート調査を行い、この結果を受けて、全国選抜大会時に両大会の監督比較と選手へのアンケートを行うこととなった。考察とともに集計資料およびグラフ等を参照して頂くと幸いである。

本年度から定期的にアンケートを行い、推移等を比較してデータを蓄積したい。

【アンケート概況】

【第1回アンケート】平成23年8月8日

対象者 秋田インターハイ参加校 142名（監督） 92名回答（回答率約65%）
理事・専門部役員 37名 29名回答（回収率 78%）

【まとめ】

- (1) 参加監督の意識や状況は概ね数字として掌握できた。
- (2) 高体連役員との情報格差（温度差）を感じるものであった。

【第2回アンケート】平成24年3月22日

対象者 全国選抜大会参加校 129名（監督） 114名回答（回収率88.3%）
同上参加選手 337名 278名回答（回収率82.4%）

1 監督アンケートの考察(インターハイ監督アンケートとの比較)

(1) 回答者所属ブロック

これは回答者全体に対するブロック別の割合であり、参加校の多いブロックが高い数値を示し、回答者の構成要素として考えるべきである。回収率88.3%を考えると、より選抜大会時の方が前回比較で精度の高い指標として考えられる。

(2) 自転車競技部顧問・指導者について

ア 顧問数

第1回同様に2名を置く学校が1番高く、続いて3名以上と1名の学校数は逆転している。生徒会顧問の学校は選抜大会では1校という数値は生徒会顧問が兼務顧問となった経緯が有るのかも知れない。いずれにしろ大会への参加現状を考えると、ケガの対応やトラック競技・ロード競技間の移動という理由からか2名以上の顧問が必要と思われる。アンケートには記していないが選抜大会は129校中、44%（58校）は2名体制で参加をしている。

イ 顧問の自転車競技経験者数

1名は経験者（レース出場経験あり）が42%でインターハイと同数。経験0名がやはり45%で同数であり、大会は変わっても半年間での差異はほとんど見られない。

ウ 競技指導者年数と所持資格

監督の指導年数は11年以上が選抜大会で54%圧倒的に高く、参加校の39%が私立学校であることも後押しをしていると推測される。しかし、残り約6割が公立高校であり、転勤や統廃合等の理由、そして定年を顧問が迎えると後任が見つからない、という現状も見聞きする。指導者育成についても自然発生を待つのではなく、方策が立てる必要を感じる。所持資格は国体参加監督が資格を有することとなり、回答者数の増加と重なり、微増ではあるが半年間で伸びているが、資格なしが第一顧問（60%）、第二顧問（86%）、第三顧問（93%）という高い数値を示している。

エ 外部コーチ（指導者）人数と所属等

外部コーチ制度は都道府県教育委員会や都道府県体育協会が中心となって多くの中学校・高等学校でも採用している。

これは専門顧問の転勤等による部活動停滞防止する意図と専門性を持った人材の起用である。アンケート結果では第1回ともに同種順位が付いている。“外部指導者なし”が約70%，続いて“1名の外部指導者”である。所属としては自転車部OBに頼るケースが圧倒的に多い。これはコーチを頼むにも職業コーチを採用するには金銭的に難しく制約条件の多い中、人材不足が結論ではないかと思われる。

(3) 高体連としての制限について

ア 大会出場者数

第1回時にはインターハイ・選抜大会出場者“現状維持”がそれぞれ、75%，77%を示していたが、選抜時は64%，66%と減少している。“やや減少させる”が10%近く上昇した。大幅減少，その他は差異が少ない。理由として考えられるのが，専門部理事会や委員長会議における現状報告などから“本来は現状で行きたい”が，仕方がない。という理由もあるかも知れない。これは国政の消費税問題ではないが，現状維持する為に人・物・金の“応分負担”をお願いした場合はこの数値は大きく変化するかも知れない。

ア. 大会出場者数(インターハイ最大500名・全国選抜大会300名)

		現状維持	やや減少させる	大幅減少	その他
IH	インターハイ	75.0	17.4	6.5	1.1%
	全国選抜大会	77.5	13.8	7.5	1.3%

		現状維持	やや減少させる	大幅減少	その他
選抜	インターハイ	64.9	28.1	5.3	1.8%
	全国選抜大会	66.7	22.8	8.6	2.2%

イ 実施種目

これも上記アと同様傾向である。“現状維持”が断トツであるが，“一部改廃”が伸びている。競技スポーツである以上，高校で完

結することなく，高体連がもつ理念と現状，競技力向上の側面を合せた形で検討を続けたい。

ウ トラックレースのギア制限

トラックレースギア制限については第1回調査後，全国都道府県大会・国民体育大会で“先取りした形”を特別ルールとして実施された。年度内ということ，競技参加における機材の安全性等の問題で無かった為に現行ルールで選抜大会は実施した。合わせて2月に行われた全国委員長会議でも議題として上げ，2011年ルールでの実施を確認した。“必要である”が10%減少し，“必要ない”が約10%増加した。“分からない”が約20%いることも対策の必要な数値である。

エ 自転車や機材の規制について

第1回アンケートそして今回ともに同水準の値を見せた。“何らかの規制が必要”は約7割を示しており，“全く必要ない”は10%程度である。これは前回考察でも記したが，高機能・高性能部品の使用競争がコスト高の自転車競技を作り上げてしまっている。と思われる監督・顧問が多い中，部品競争も含めて自転車競技と考える先生方も存在することを意味している。実際に使用している選手はどのように感じているのか。という疑問から選手アンケートに踏み切ったわけである。

(4) 各学校で指導上の課題や問題点対策について

課題や問題点は第1回アンケートと選抜大会時アンケートともに同様な数値を示し，安全指導，練習環境確保，部員確保である。そして，開催希望の講習会は専門的な技術指導，自転車メンテナンスという結果である。当専門部でもこれを受け止め，施策を進めてはどうかと考える。

(5) アンチドーピングについての指導

これもほぼ同数の数値であり6割が指導している。3割が指導していないという結果である。競技スポーツの普及・啓蒙について上記(4)同様，早急に取り組むべき課題である。

2 選手アンケートの考察

当専門部、初と思われる選手へアンケートを実施した。それは主体となる選手の実態を明らかにする事により、より有効な施策の立案そして検証の手がかりとなりうると考えた為である。更に高体連専門部は各都道府県からの加盟校顧問からの集合体である為、価値観や判断基準が所属部活動や都道府県内に重きを置いてしまう傾向も否めない。全国の高校生意識や実態を調査することは意義のあるものと考えた。

(1) 高校入学前および部活動入部時期について

a 自転車競技を始めた時期

高校入学以前	28%
高校入学直後	63%
それ以降	9%

選抜大会参加者の約3割が高校以前に自転車競技を始めている。

b 自転車競技を始めたきっかけ

自分で決めた54%、家族・親類の勧め27%と続く。これは何かの情報から自転車競技の存在を知り、自ら競技環境を求めて競技部設置校へ入学したと思われる。今後、どのような情報が一番影響したのか調査をする必要を感じる。

c 中学時代の部活動

何らかの運動部に所属していた選手が90%を超える。個人スポーツ・チームスポーツによる差異はあまり感じられない。

d 中学時代の部活動実績

選抜大会参加選手の約90%が何らかの運動部に所属しているが、実績としては地区大会と都道府県大会が86%と多い。実績でブロック大会以上の実績者は13%であり、今後は高校進学後の自転車競技実績と相関があるかは興味を引くところである。

e 中学時代の部活動満足度

“満足している”63%、“満足していない”37%という結果。しかし、その後の質問項目で自転車競技部活に満足しているという結果は92%と跳ね上がる。中学時代は学校や競技種目により、専門指導者や専門的なトレーニングなど充実度が低かったのかも知れない。

f 高校で自転車競技部に入部したきっかけ

前質問項目では“自転車競技を始めたきっかけ”，今回は自転車競技部に“入部したきっかけ”と分けている。

アンケート対象選手は全て高体連登録学校・選手であるが、17%の相違に疑問を感じる。自転車競技を始めるきっかけは自分以外の要因もあるが、部に入るきっかけは自分で決めた選手が多いという事であろうか。

(2) 現在の活動状況について

g 部活動全体に対して

大会参加選手の9割は満足している。それ以外の選手については、新年度登録時に行われるアンケートを注視したい。

h 練習環境について

練習環境については、“満足している”が合わせて89%、しかし、残り11%が“不満を持っている”，約30名の選手である。これも次回は“何が不満”であるか、など具体性を調査してみたい。

i 練習時間について

“適切である”，が約70%であるのに対して“判断ができない”つまり，“よくわからない”と回答した全国大会出場選手が約20%いることは問題視したい。選手が情報を取る環境作りが必要と考える。

j 練習内容について

“とても満足”，“まあまあ満足”と合わせ89%の高い数値に対して“不満である”回答が11%これも上記の練習環境と同数値であることから、何が不満であるか具体性の調査も必要と思われる。

k 休養日について

“週に1回”が約50%、次が“ほとんど休まない”。という回答が24.6%。
約70名の選手は休みなく練習している
ということである。

l 部の機材について

“適切・困らない”が64%。“不足”と回答した生徒36%。これは部活顧問をはじめ関係者が努力して調達している理由からだろうか。選抜大会参加者の100名は困っているという計算になる。

今回、アンケートと同時に選抜大会出場者の使用自転車状況を写真に収めさせて頂いたが、これも参考してみたい。

m 練習時使用ロードレーサー

自分の所有が90%を超える。入部してからロードレーサー購入を勧める顧問の影響であろうか。通学時にも使用できる点が推測できる。

n 練習時使用トラックレーサー

意外な結果となったのが、トラックレーサーの所有状況である。“自分の所有物”と回答した選手は26%程度。それ以外は借りものという結果となる。ロードレーサーは購入させ、トラックレーサーは部や連盟の所有で両方買わせるコスト高を工夫しているのではないか。

o 大会使用ロードレーサー

上記mの回答で90%が自分の所有物であるが、試合用となると84%と下がる。試合時には所有以外の借り物を使用しているのだろうか。

p 大会使用トラックレーサー

上記同様に自分所有のトラックレーサーを使用は約17%。人数にすると約40名は自分所有のトラックレーサーで出場し、残り240名は部・連盟所有が多いという事になる。これは部を運営する上で大きなコストを要するが実態である。機材の調達について学校の部、地方車連が大きな重みをもっている。共有機材であれば、ルール変更による部品の交換や消耗・摩耗度により、部品変更も難しくなるという側面が浮き彫りとなった。

3 自転車競技に関する意識について

q トレーニング内容の決め方

“監督・コーチをはじめ指導者が決める”という回答が64%“相談しながら決める”21%と合わせて8割にのぼる。

“自分で決める”10%，“その他”3%が気になる。新しい情報提供があれば指導者に伝達する事で選手へ還元できると感じる。手段としては高体連ホームページの利用が良いと考えるが、以外にも高体連ホームページの存在を知らない選手がいることも選抜大会で明らかになった。

r トラックレース試合時のギア比の決め方

トレーニング内容は指導者、そして相談しながら決める選手が8割を超えるが、ギア決定に関しての回答は3分割される。

監督・コーチが決める26%
相談しながら40%
自分で決める32%

と自分で決めるという値が上昇している。つまり、選手によってはコンディションや感覚的に決定していると思われる。

s トラックレース練習中のギア比の変更

変更する 66%
変更しない33%

選抜参加選手の91人はギア変更なしでトレーニングをしている計算となる。ウォーミングアップ、本練習、スタート練習等、目的と効果によりギアを変更してトレーニングを行う方法があるが、目的と効果ははっきりしていれば良いと考える。

t 大会での機材制限について

これは意外な回答分布であった。約7割の選抜大会参加監督は、“ある程度制限があった方がよい”と回答しているのに対し、選手側は23%である。

トラックレーサーは学校の部・連盟で準備するので、意識の違いが表れた結果と思う。選手側の意見としてパーセントが高いのは、“機材も競争した方がよい”とすることである。試合のコンディション等による使い分け、自分の能力に見合った機材の選択といった創意工夫ではなく、単なる新機材や高額機材の使用を意味するものであったならば警鐘を鳴らす必要を感じる。

u 選手として欲しい情報

上位2項目まで回答の中、トレーニング方法とレース戦術、体の手入れや食事方法の順である。選手は自ら競技力向上を願っており、更なる向上を求めている。トレーニング内容には概ね満足しているが、より一層、競技力向上の為のヒントを欲しがっているということなる。これは推測ではあるが学校の部活動はチームワークやチーム全体、学年別、種目別の平等的な指導者の価値観により、個別性の部分が少ない、または損なわれているのかも知れない。

v 自転車部活動で目標にしたいこと

これは12項目それぞれに回答が分散した。国際大会出場から思い出づくり、まで多種多様である。多い順に人数を拾い出してみたい。

(278名回答) 端数調整

全国大会出場	74人
自己記録・成績の更新	40人
体を鍛える	29人
国際大会出場	29人
精神力を鍛える	25人
競輪学校合格	21人
大学進学先確保	18人
ロードプロへのステップ	12人
仲間と楽しく活動	11人
周囲から認めて欲しい	10人
思い出作り・その他	9人

この回答項目に関する考察は前提により内容も変わってしまうので、分けて考えてみたい。一つ目は、学校が設置している部活動、更に全国専門部に加盟しているという観点からの目標設定。そして二つ目は選手個々の自転車競技活動としての目標設定である。つまり、目標設定の主体が選手側からか、それとも学校(顧問)が設定しているかということである。

学校教育活動の一環として行われている部活動は競技力向上が全てではない。部活動を通しての規範意識向上や教室では体験できない様々な人間教育の場でもある。成長著しい生徒達が目標を共有し、地区大会、都道府県大会、そして全国大会出場を目標とする意識は理解できる。高校球児が一同に“目指せ、甲子園”と同様な図式である。

しかし、競技力向上や将来的な国際競争

力を視野に入れた選手が少ない事は少々期待外れであった。なぜならば、目標設定はそれ以上の努力や行動は期待できないからである。高校部活動スポーツは全登録者の8割がサッカー、バスケ、テニス、陸上など8競技で占め、自転車競技の活動者は全体の0.2%である。私見ではあるが都道府県大会は、大会での成績上位とブロック大会で活躍を目標にする。ブロック大会も同様と考え、そして全国大会出場校はその大会での上位入賞とそれ以上、つまり国際大会へ意識の高い選手は目を向けて欲しいと思う。

自転車競技における全国大会への出場は加盟校の約60%となり、半数以上が出場できてしまう。インターハイ比較ではあるが、上位12競技では全国大会出場するのに加盟校の10%を切っている。サッカー、バスケでは1%台、仮に出場制限を10%とすると自転車競技は全国大会へ24校しか出場できない計算となる。

【競輪学校合格目標者】

競輪学校合格を目指す生徒は、この調査から21名と参加者の10%以下であることも注目できる

w 自転車競技の魅力

大会参加者の99%は競技に魅力を感じており、喜ばしい限りである。監督をはじめ関係者にも同様の回答があることを期待したい。

x 自転車競技はお金がかかるスポーツ

これも上記同様の結果である。選手の立場から機材・身体のメンテナンス、その他練習環境整備などで実感していることが分かる。

y 自転車競技は他の種目と比べてケガが多いスポーツと思う

これは自分のこと、部内関係者を比べているのだろうか。落車経験の無い、少ない選手は“思わない。”他の競技と比較しているのか詳しく調査が必要な項目である。

8割はケガが多いと意識していることは事実である。ケガの原因と防止対策に努めていると思うが全国高体連としてもガイドラインは必要と感じる。

z 自転車競技は他の種目と比べて全国大会に出場する事が簡単だと思う

“約50%選手は簡単”と答え、残り“半数は簡単ではない。”と回答している。

今回は感覚的な意識結果と言えるのではないだろうか。繰り返すが、事実関係だけを見ると、インターハイにおいて自転車競技は登録者1年生から3年生の新入部員まで含め、3人に1人出場できることは理解して頂きたい。

α 自転車競技は生涯を通じて長く続けられることができるスポーツだと思う

生涯スポーツだと思うと回答した選手は87%にのぼり、高校卒業後もそれぞれの目的や目標に合わせて続けられることを意味している。

しかし、競技環境は相反して調査にはないが、“続けている”という数値は少ないのではないかと推測する。

β 社会から競技スポーツとして広く認知されていると思う

“認知されているスポーツとは思わない。”という回答が76%あることは残念な結果である。逆に“認知されている”ということはどのような状況を示すのだろうか。テレビ放映がある、中学校やより多くの高校に競技部が設置されていることであろうか。多くの選手が魅力を感じていながら、認知されていない。という意識を持っていることは改善の必要を感じる。競技選手自身がスポーツのすばらしさや効果を充分に感じ取り、広くアピールしていくことも重要であり、高体連関係者と協働して働きかけを進めることが重要ではないかと思う。

おわりに

今回のアンケート調査は全国高体連技術専門部会が高体連登録選手の現状理解と掌握するために実施した。問題点を明らかにし、現状の共通理解が図らなければ、改善、解決案は見つからない。

客観的なデータの必要性

昨今の経済情勢や様々な淘汰、縮小を余儀なくされている社会では、必要性や重要性を数値化してアピールことが求められてくると感じる。関係団体をはじめ広く協力を求める上でも説得力のある根拠を示して行くことが重要なのではないだろうか。

作業に当たっては部会員が分担して、質問項目、様式や体裁など検討を重ねた。

また、回収率の高さもすばらしいと評価できる。改めてアンケートに協力頂いたいただいた監督と選手にこの場を借りてお礼を述べたい。これには回答された選手や監督たちは、協力結果がより良い方向へ進むであろうという期待感も含まれていると感じている。回答集計結果の速報版は選抜大会トラック開催時に発表させて頂いた。本部会員は審判業務の傍ら、夜、宿舎で集計作業を行って頂いたことには頭が下がる。多くの関係者の目に触れることにより、相互理解や意思疎通が良くなると感じる。

新年度登録時アンケートにより、全国大会出場選手以外の状況もデータとして蓄積していきたい。また、アンケートの質問項目や方法などご意見があれば出して頂くことにより、発展性の高い方向へ進めたい。